

優秀賞

優しさあふれる満員電車

佐賀県 佐賀清和中学校 一年
北里 理平

「ありがとうね。あなたたちみたいに優しい人に、この子も育ててほしいな。」

そんなすてきな言葉を私たちは、もらうことができた。

それは、今年の8月のできごとである。台風が沖縄にUターンして猛威をふるう中、私たちはハンドボールの九州大会のため、沖縄に五 5 日間滞在した。その帰り、博多から佐賀までの電車の中のできごとである。

お盆前の車内は、満員で人がごったがえしていた。5 日間の荷物と試合のボールなどをもち、クタクタの私たちだった。指導者の先生は、私たちのスーツケースを見守るために一人別の場所に待機してくださって、感謝の気持ちでいっぱいだった。

早めに乗車するため、引率の先生の誘導のもと自由席に座れるようにホームに並んだ。そのおかげで、14 人の生徒みんな座ることができた。私も同級生の S 君と隣の席に座ることができ、ホッとした。

満員電車で、たくさんの人が立っていた。私には、11 歳年の離れた 2 歳の弟がいる。その弟と同じくらいの子どもを連れてたご夫婦と、高齢のご夫妻が私たちの座席の横の通路に立っていた。小さい子どもを連れての電車の大変さは、身をもって経験したことがある。そして、コロナ禍で生まれた弟は、みんなの優しさをたくさんもらって大きくなった、といつも母が言っていた。

僕は、隣に座っている友達の S 君と目を合わせて、

「どうする?」「替わろうか。」「電車が動いているときに替わったら危ないから、次の停車駅で替わろう。」と話した。次の停車駅になった。「替わります。」「どうぞ。」と言って席を立った。

「ありがとう。」

「ありがとうね。あなたたちみたいな優しい人に、この子も育ててほしいな。」

そんなすてきな言葉ももらった。そして、小さい男の子が照れたように「ありがとう」と、笑顔で言ってくれた。高齢のご夫婦と、小さい男の子が座ることができた。私は、疲れが台風より早いスピードで、飛んでいったような気がした。

満員電車が、佐賀駅に到着した。降りる際に、指導の先生が、

「青い T シャツの子どもたちが佐賀駅で降ります。よろしくお願いします。」

と少し大きい声で、周りの方にお知らせをしてくださった。すると、周りの方が道を開けてくださり、私たちのスーツケースを抱えてくださった方もいて、無事に佐賀に降りることができた。その光景に、私は感動した。

下車後、私たちが席を譲ったことを、ほかの先生から聞いた指導の先生が私たちをほめてくださった。ほめていただいたことも嬉しかったけれど、席を替わろうと思った私と、チームメイトの仲良しの S 君も同じ気持ちだったことが何より嬉しかった。

満員電車は、優しさと小さな親切であふれていた。優しさのバトンがどんどんつながり、私もその一人になれたことが嬉しかった。